

その場所の土と水を練り  
 その場所の木を燃料に  
 その場所で焼き固め  
 その場所に集うひとびとが建てる

その場所の土と水で育て  
 その場所の灰を肥料に  
 その場所で料理し  
 その場所に集うひとびとが食べる

たべものたてものをつくり続けることで  
 人と場所 人と人がつながり続ける建築の提案

# まわりがまわり窯のレシピ



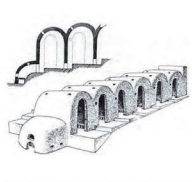
## 1 全壊した窯を直すひとびとのあつまり —茨城県・笠間市

江戸時代より陶業と生活が密着していた茨城県笠間市には、今もおよそ 20 もの登り窯(のぼりがま)があり、その多くが現役であった。しかし、隠れた被災地であるこの地で、そのすべては崩壊してしまった。



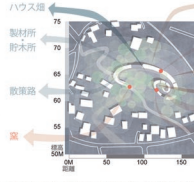
しかし、全壊した窯を直すというひとびとのつながりが芽生え始めている。さて、このつながり窯の姿を取り戻すときには消えてしまふものなのだろうか。登り窯をきつかければ、たべものたてものをつくり続けることで、人と場所、人と人がつながり続ける建築の提案である。

## 2 登り窯—人間の知恵と自然の力の融合による装置



登り窯は、斜面した地形に沿うように、各階成室を直列に連続させた窯である。その場所の土と水を練って焼くという「人の知恵」と、傾斜した地形、上へと登る火の性質という「自然の力」を融合させた、場所に向き合うことで生まれた装置である。

## 3 「登り窯+α」を等高線に沿って回す



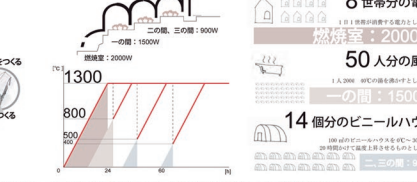
そこで、登り窯の発する熱エネルギーを最大限に生かすプログラムをつなげてゆく。熱をきつかけとして発生するエネルギー(風・木・水など)までも生かせるこれらのプログラムを、丘の等高線に沿うように回すことになる。方位と高さがある住居した「人・エネルギー・場所」の豊かさが多様なつながりが生まれる。

## 4 窯をめぐるたべものたてものつながり —産地消地産 場所の素材を「回す」窯

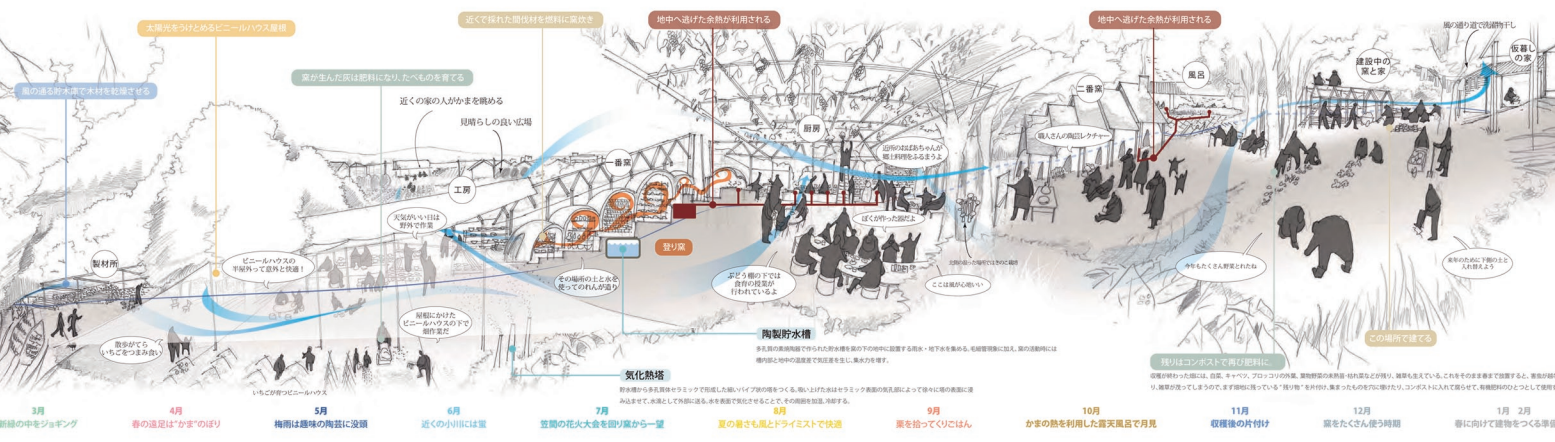


象徴した産地消地産はかつて人と自然が保っていた均衡を失ったという場面に陥りました。登り窯もまた、材料を得るために入ることもなく、採掘土は産地となり、空気の流れは山、ひとびとの心から離れてしまった。しかし窯に再び火をともし、薪が維持され、土が暖まれ、陶器やレンガや灰が生まれる。レンガや陶器材はたてものをつくる建材となり、熱はたべもの調理や乾燥に使われ、灰やその残りもまた肥料になり土に還る。回り窯をきつかければ場所の素材が新しい均輪とともに回り続ける。

## 5 窯の温度変化と熱エネルギー利用の関係



## 6 @り窯をめぐる人とエネルギーと場所のつながり



### 木とのつながり

空間周辺には針葉樹と広葉樹が混在している。建材に選んだ針葉樹は消滅して木骨レンガのフレームに、自然豊かな広葉樹は温まった窯をきつかけ、コンクリートの地盤が生まれる。

### 土とのつながり

窯で焼かれた花崗岩から生成した粘土で陶器レンガをつくる。ここで生まれた陶器レンガのフレームとして利用される。フレームの組み方、レンガの並べ方の組み合わせでいろいろな形が作れる。形や配置は、たてものづくりの参加者が主体的に決定していく。

### 風とのつながり

窯の熱により空気は上昇し、窯の中心には上昇気流が生じる。上昇気流によって窯の地上中心気圧は低圧となり、周囲の空気が中心に向かって流れていく。窯の中心と周囲との気圧差によって、窯の中心には上昇気流が生じる。上昇気流によって窯の地上中心気圧は低圧となり、周囲の空気が中心に向かって流れていく。窯の中心と周囲との気圧差によって、窯の中心には上昇気流が生じる。

### 水とのつながり

多孔質性と浸透性が作用する陶製貯水槽。構造は陶製が本来有する多孔質性(土とそれより大きい気孔を有した形)でつくっていく。陶製気孔は中心に水分を、加工した気孔で陶器間に浸透した水分をそれぞれ集める。窯の活動で内部と外部では気圧差が生じ、水は貯水槽内部に集まり込んでいく。